

精神分析とシステム論の対話 —個人、家族、地域の協働に向けて—

児童活動グループの実践経験から

国際基督教大学 西村馨

日本心理臨床学会第35回秋季大会
実行委員会企画シンポジウム3
2016年9月6日 パシフィコ横浜

子育て環境の変化：地域→家族

- 地域（ムラ社会）で助け合わないと生きていけなかった状態から、家族単位、個人単位で生きていくことが可能に
 - = 地域で行っていた子育てが家族の負担に
子育ての技能（アート）が伝達されない
 - **家族の孤立化、親同士の孤立化**
 - 「抱える環境」(Winnicott)の弱体化：
家庭内での愛着形成の問題、虐待

子育て環境の変化：家族→個人

- 社会への適応の重視
 - ✓ 競争に有利になる「アイテム」習得の重視
 - ✓ 個人の夢実現の重視（←親の願望の反映）
= 親子が噛みあわないまま絡みあう状態
- 文明の繁栄の影
 - ✓ 行き届いた物質的ケアのなかで動物本来の能力や感性が弱体化する

子育て環境の変化：子どもにとって

- 子どもの「遊び場」の喪失⇔身体の虚弱化
 - ✓動物としての潜在能力を開発する機会の減少（感覚・運動機能、関係の絆）
 - ✓社会的存在（人間）としての潜在能力を養う機会の減少（情緒、言語、協力、共感性など）
- かつての環境ならば発達障害を補っていた予防因子が消え、特徴が現れやすくなっている？
 - ✓遊びの不足がADHDを生む（Panksepp）
 - ✓じゃれあい？ 本気の喧嘩？

キャンプではみんな「普通」になる



Dr. Saul Scheidlinger and Activity Group Therapy



1950年ごろのactivity
group therapyの様子

活動集団療法の創始者Slavsonの高弟Dr. Scheidlingerが小谷英文教授（当時）の招へいでICUでセミナーを行った(1994, 97年) ことに刺激を受け、大学院生が活動グループを立ち上げ展開した。

児童活動グループの実践

- 身体運動を含む活動を主としたグループ
- 週1回2時間、1年3クール（クールごとに個別面接）
- 小学生男女別、各6～9名
- のびのびしたい子、仲間関係の難しい子、発達障害（疑い含む）の子の混合
- 大学院生・修了生・学部生が2～4名が担当
- ①個別勉強、②身体運動系活動、③自己表現活動／ゲーム／造形

活動の実際：身体運動系



活動の実際：自己表現系



親子合同プログラム、キャンプ



児童活動グループ実践の理論的背景①

精神分析的な理解と手法

- ①対話：活動を媒介として生じてくるさまざまな関係を促進し、感情等の自己表現を促進する
- ②発達理論：とりわけ学童期の仲間関係発達、成就感（遊びそのものの意義）
- ③活動に現れる象徴的表現の精神分析的な理解
- ④愛着理論：安全基地としてのグループ発達
- ⑤関係性理論：エナクトメントの意味の理解

児童活動グループ実践の理論的背景②

システム理論的理解と手法

- ①グループカ動の理解
- ②親子合同活動：子どもの別の側面の発見
cf. Multifamily psychoanalysis (Badaracco)
→子どもの「健康な」部分、行動や情緒の理解
- ③親同士の交流：「うちの家だけじゃない」
- ④親へのコンサルテーション、親子面接（適宜）

児童活動グループ実践の理論的背景③

感覚運動理論

- ①自然に「感覚を育てる」運動・活動（特に発達障害児に重要）
- ②運動能力（得意な部分）の活性化（特に発達障害児に重要）
→**感覚・知覚・運動**機能がもたらす心的機能（自我機能）の意味理解（例：二次元知覚）
- ③運動を仲間とともにすることによる感覚の共鳴体験の促進

自閉スペクトラム障害児童の例

- サトシ：小2の春に、学級集団になじめず、思った通りにならないと乱暴、何かに夢中になるとのめり込む
- 母親が改善を期待してグループ参加を申し込む
- このまま受け入れるのは困難と考えられ、スクールカウンセラーなどの支援体制を整えた上で再度申し込みをするよう伝える
- 自閉スペクトラム障害の診断を受け、特別支援学級の利用を開始して、3年生時に申し込む

事例（続き）

- 参加後数回は非常におとなしかった
- サトシはグループの輪からたびたび外れ、暴言を吐いていた
- 親子合同セッションでもサトシは輪から外れた
- スタッフは「やってるな～」と見守る
- 母親は「望ましい行動」を指導しようとする
- とはいえ、暴力もなく、毎回楽しんで参加していた（主に仲の良い2人とつるんでいたが）

事例（続き）

- サトシは、時折一人離れて虫探しに没頭
- 見つけてきたハチやセミを殺していた
- あるとき、カマキリを持ってきたサトシを囲み、グループのみんなでカマキリを見ることに
- 次の回「面白いものを見つけてきて絵に描く」という課題を導入
- サトシは喜んでカマキリをとってきて描いた
- グループはサトシの緻密な絵に驚嘆し、尊敬
- グループの仲間と一緒に「虫の家を作る」

事例（続き）

- 4年生、年下のメンバーに虫や絵を求められると与える
- 徐々に、他のメンバーとのつながりもできる
- 学級担任からも「友人思いだ」と評される
- 母親も「あれでいいんだ」と思うように：
- 「温かく心を育て、毎日安心して楽しく生活を送る」こと
- 「不安を抱えていた親子を迎え入れ、居場所を与え、羽ばたいていく」こと

事例の意味するもの

- 子ども個人の中の「動物」（サトシの知覚の鋭さ、感情的敏感さ）、「人間」（社会的存在として協調すること）の未統合
- 母親は、サトシをことば（論理、規則、正義）で「人間」にしようとあせっていた
- サトシは、自分を「人間」の社会に適応させることができず孤独を感じていたが、一方でつながりを強く求めていた
- サトシの問題？

事例の意味するもの（続き）

- 子どもに「問題」があって、その子が変わることが「解決」だとは限らない
- 周囲がその子とつながり、理解することができるポイントが見つければ、関係が変わり、その子も変わってくる
- 子どものあり方に沿って、関わりを作ること：
動物的部分の尊重→**関係づけ**→**情緒的**なつながり（人間）の感覚→**集団規範**の習得（社会とのつながり）

本グループの意義

- **子ども**に自分らしく成長する場を与える
 - ✓ 素朴な体験を与える：感覚・運動
 - ✓ 仲間体験を与える（地域の中に学校と違う仲間のいる意義）
 - ✓ 一人ひとりのあり方が許される風土の中で、自分の表現が生まれる、野性が復権する
 - ✓ 新たな関係を見出し、つながりが深まる

本グループの意義

- 親同士の交流の場を地域の中に作る
 - ✓ 子どもの別な、健康な側面を知る
 - ✓ 子どもを理解する視点を得る
 - ✓ 孤立感が緩和される
 - ✓ 情報交換
 - ✓ 親の心の中の子ども部分を広げる

個人、家族、地域の協働に向けて 「子育て」への示唆

- まずは「楽しみ」！
- 本人に変わることを強いるよりも、子どもの身体が発するメッセージを受けとめること
- 「うまくいっていない」側面に注目するばかりでなく、「うまくいく」側面を探ること
- 親自身が一步下がって子どもを見ること、自分自身を楽しませること（心の中の子どもとつき合うこと）の重要性

個人、家族、地域の協働に向けて 「子育て」への示唆

- 子どもの不安を抱え、受けとめる安全な空間を
- 子ども自身の潜在能力を伸ばす素朴な体験を
- 親御さんの心のこわばりも緩め、安心を回復する場を
- 病理の治療にとらわれず、特性を生かしながら成長を可能にする視点を

ご清聴ありがとうございました

